

# 大学生活に対する志向性に及ぼす中学高校部活動の影響

## —教科外活動の長期的効果に関する分析可能性—

長谷川 祐介\*

【要 旨】 本稿は大学生対象の質問紙調査の再分析をもとに、大学生活に対する志向性に及ぼす中学・高校部活動参加の影響について検討を行った。分析の結果、次の2点が明らかになった。(1) 中学部活動の不参加は、大学生活における遊びへの志向性を低下させる要因となっていたが、それは大学1年生のみだった。(2) 高校で引退するまで継続して部活動参加した経験は、大学生活においてスキル獲得に対する志向性を高める要因となっていたが、それは大学2年生以上のみだった。分析結果をもとに教科外活動の長期的効果に関する研究可能性について考察した。その結果、大学生調査の活用、経年比較分析の重要性、活動の多様性への着目、特別活動への着目、ライフストーリーによる研究可能性について指摘した。

【キーワード】 部活動 特別活動 長期的効果

## I 問題の所在

本稿の目的は、複数の大学で実施された大学生対象の質問紙調査の再分析をもとに、大学生活に対する志向性に及ぼす中学・高校部活動参加の影響について検討を行うことである。その結果をもとに部活動や特別活動など、教科外活動の長期的効果に関する分析可能性について考察する。

教科外活動に関する実証研究は主に部活動を対象にし、実施されてきた。特に1990年代以降、アメリカの **Extracurricular Activity** (課外活動) に関する実証研究を参考に教育社会学や教育心理学において実証研究が行われてきた。たとえば白松(1995)は高校生を対象とした質問紙調査を用いて、部活動への参加が学校への適応を増大させることを明らかにした。同様の分析結果は吉村(1997)、西島ら(1999)、角谷・無藤(2001)、東野(2003)、岡田(2009)などにも見られる。また白松(1997)や角谷(2005)は部活動参加による学校生活へのコミットメントの促進が、学業成績の向上にも影響を与えていることを明らかにしている。

これら先行研究は中高校生を対象にした調査データの分析に基づくものであったことから、主に短期的効果の測定を行っていたと解釈することができる。しかし教育効果は短期的効果に

---

平成22年11月22日受理

\*はせがわ・ゆうすけ 大分大学教育福祉科学部発達科学教育講座(特別活動論, 生徒指導論)

限定されない。教育効果の分類を行った新堀（1987）によれば、効果の測定をいかなる時点において行うかによって短期的効果と長期的効果に区別することができる。短期と長期に関する明確な区分は容易ではないが、一般的には学校在学中の効果であれば短期的効果、学校卒業後の効果であれば長期的効果と捉えられよう。確かに新堀（1987）が指摘しているように、長期的効果を実証的に明らかにすることは容易ではない。しかし学校教育の諸活動が生徒の卒業後の生活において有用となる知識や態度を身につけられることを目的としている限り、長期的効果の解明に関心を向けることは重要な研究課題である。このことは部活動など教科外活動についても同様である。

長期的効果について、アメリカでは **Extracurricular Activity** に関する実証研究の一環として分析が試みられている。具体的には卒業後の生活に **Extracurricular Activity** の経験がどのような影響を及ぼしているかどうかを検討している。たとえば Mahoney ら（2003）は、縦断データを用いて、卒業後の教育達成に **Extracurricular Activity** が正の影響があることを実証的に明らかにしている。

一方、日本では部活動の長期的効果に関する実証研究は非常に少ない。その原因の1つは日本ではアメリカのような縦断的データの入手が困難であることが挙げられるだろう。特に近年、個人情報保護の意識が高まっており、卒業生の調査を実施することは困難になってきている。アメリカと同様の調査分析を行いたくても、その実現は容易でなくなっている。

こうした状況下で、今後の日本における教科外活動の長期的効果に関する分析可能性を考えると、斎藤（2001）の研究は注目に値する。斎藤（2001）は大学生に関する質問紙調査データを用いて、大学生生活に与える中学・高校部活動経験の影響に関する分析を試みている。その結果、中学校、高校部活動の経験者は大学における友人関係においてストレスを抱えることが少なく、大学嫌いになることが少ないことを明らかにした。確かに大学生ならば一般的に比較的データの入手は容易であることと、大学生生活も卒業後の生活の1つであるから、「長期的効果」を検討することは可能である。しかし斎藤（2001）は分析対象が1つの大学・学部、さらに1年生に限定されている点や、分析において部活動以外の中学生生活、高校生活に関する変数の影響を考慮していないことなどが課題として残されている。

そこで本稿では、複数の大学で実施された大学生対象の質問紙データの再分析に基づいて、大学生生活に及ぼす中学と高校部活動経験の影響について検討する。今回、大学生生活を示す指標として、学生自身が考える大学生生活のあり方への考えや希望などである大学生生活に対する志向性に着目する。その理由は、大学生生活は高校生活以上に、学生個人の志向性によって規定されるからである。高校以前までは学校側が定めた時間割によって行動が規定される。一方、大学の場合は原則、授業選択は学生個人にゆだねられており、また授業以外の自由な時間も高校以上に多い。高校以上に大学では学生個人の志向性が生活のあり方に大きな影響を及ぼしているだろう。このように大学生生活に対する志向性は大学生生活の実態を捉える上で重要な指標と考えられ、それを従属変数とした分析を行うことにより、中学高校部活動の大学生生活への影響、さらには部活動の長期的効果の一端を解明することに貢献できると考える。

以下、分析方法について説明を行い、大学生生活に対する志向性に関する中学と高校部活動参加の影響について分析を行う。その結果を踏まえて、部活動を含めた教科外活動に関する長期的効果の分析可能性について考察を行う。

## Ⅱ 分析方法

### 1 分析の視点

本稿では大学生生活に対する志向性に及ぼす大学入学以前の部活動参加の影響について検討する。まず大学入学以前の部活動参加として、中学と高校の部活動参加状況に着目する。部活動参加状況は大きく3つに区別する。1つ目は「継続者」で、これは部活動に最後まで(引退まで)継続して参加した者を指す。調査票において中学もしくは高校の部活動の参加状況に関する項目において「引退するまで参加していた」を選択した者が「継続者」に該当する。2つ目は「退部者」で、これは部活動に参加したが、引退前に中途退部した者を指す。調査票において「参加していたけど途中でやめた」を選択した者が「退部者」に該当する。3つ目は「不参加者」で、一度の部活動に参加しなかった者を指す<sup>1)</sup>。参加の有無だけでなく、部活動参加の期間、すなわち引退まで継続して参加したかどうかということも射程に入れ、分析を行う。

その上で、大学生生活に対する志向性と中学高校の部活動参加状況の関連を検討する。今回は大学生の学年による相違にも着目したい。すなわち部活動参加状況別の大学生生活に対する志向性の相違は、部活動参加から比較的あまり時間が経過していない1年生だけにみられるのか、それとも時間が経過した2年生以上においても見られるのか、それとも1年生では相違はなかったが2年生以上になると相違が見られるようになるか、という点について検討する。なお表1からわかるように今回の調査対象者は大学3、4年生が少ない。そのため1年生と2年生以上に2つのグループに区別して分析する。

さらに大学生生活に対する志向性を従属変数とした重回帰分析を行う。独立変数は部活動以外の変数として、大学生生活に関する変数と中学生生活や高校生活に関する変数を想定し、それらの影響を取り除いてもなお部活動参加が大学生生活に対する志向性に影響を及ぼしているのか検討する。また重回帰分析においても学年別(1年生のみ/2年生以上)の分析を行い、部活動参加の影響のあらわれ方が時間経過によって相違をもたらすのかどうか検討する。

### 2 分析に用いるデータの概要

本研究は、大学生を対象とした部活動に関する調査(質問紙調査)のデータの再分析を行う。この調査は高校部活動の多様性などに関する分析を行うために設計されたものであり、すでに長谷川(2005, 2006)などにおいて分析結果の成果を公表している。また調査は2003年4月から5月にかけて実施されたものであり、現時点ではやや古いデータとなっていることに留意する必要がある。

しかし一般的な大学生調査と異なり、中学や高校の部活動参加状況が把握されており、本稿の分析関心には最適な調査データである。また表1からわかるように、有効回答者数は1754名とサンプルサイズが比較的大きいデータでもある。

さらに調査対象大学は斉藤(2001)と異なり、複数の大学の学生が調査対象となっていた。具体的には中国・四国地方に所在する6つの4年制大学(うち国立2校、私立4校)である。部活動の長期的効果の一端を明らかにする上でこのデータを再分析することは研究上の意義があると考えられる。

表 1 調査対象者の概要

大学	国立A大	国立B大	私立C大	私立D大	私立E大	私立F大	合計
	24.9	21.4	24.8	9.1	15.1	4.8	100.0 (1754)
性別	男	女	合計				
	55.1	44.9	100.0 (1751)				
学年	1年	2年	3年	4年以上	合計		
	52.9	27.7	16.2	3.2	100.0 (1750)		
学部	文科系	理科系	教育	その他	合計		
	52.8	20.4	20.0	6.7	100.0 (1751)		
大学サークル	体育会系	体育同好会系	文化系	音楽系	その他	不参加	合計
	20.0	7.5	10.7	5.4	2.1	54.3	100.0 (1713)
出身高校の設置者	国立	公立	私立	合計			
	3.3	78.8	17.9	100.0 (1725)			
出身高校の課程	普通科系	商業科系	工業科系	体育科系	総合学科系	その他	合計
	86.5	3.5	3.2	0.2	2.8	3.8	100.0 (1753)

※ 数値は%、( )内は人数。

分析の前に中学校と高校部活動の参加状況を確認したい(表2)。まず中学についてはほとんどの者が部活動に参加していたことがわかる。具体的には継続者が83.4%、中退者が9.9%となっており、それらの合計である参加者は93.3%となっていた。中学校の場合、生徒指導の一環として部活動参加を奨励する学校が多いため、非常に高い参加率となっているものと推察される。一方、高校になると部活動参加の割合は減少する。継続者が61.9%、中退者が15.2%となっており、それらの合計である参加者は77.1%となっていた。中学と比べ高校の参加状況が低くなっているのは、高校の場合、部活動参加が生徒の自主性に委ねる学校が多いためと考えられる。しかしそれでもなお部活動参加者が7割近くもいることから、多くの高校生にとって部活動の参加は高校生活において重要な位置づけがなされていることが推察される<sup>2)</sup>。

表 2 中学部活動、高校部活動の参加状況

	継続者	退部者	不参加者	参加者 (継続者+退部者)
中学部活動	83.3%	9.9%	6.7%	93.3%
高校部活動	61.9%	15.2%	22.9%	77.1%

### Ⅲ 分析結果

#### 1 部活動参加別にみた大学生活に対する志向性

はじめに部活動参加別にみた大学生活に対する志向性の相違を検討したい。あらかじめ大学生活に対する志向性に関する項目(「とてもあてはまる(4点)」から「まったくあてはまらない(1点)」の4件法)を用いて因子分析(固有値に基づく重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)を行った。解釈可能性等を検討した結果、最終的に表3に掲載している7項目を用いて分析を行い、2つの因子が抽出された。

第1因子は「彼氏や彼女と遊びたい」「最新の流行をすぐに取り入れたい」などの授業や学習

以外の遊びに関心を向けている項目によって構成されていたことから、「遊び志向」と命名した。第2因子は「英語の勉強をしたい」「パソコンの勉強をしたい」など、大学生生活において何かしらのスキル獲得に対する関心を示す項目によって構成されていたことから、「スキル獲得志向」と命名した。

表 3 大学生生活に対する志向性に関する因子分析結果

	遊び志向	スキル獲得志向			
彼氏や彼女と遊びたい	0.809	-0.062	因子相関行列		
コンパに行きたい	0.686	-0.103			
最新の流行をすぐ取り入れたい	0.475	0.134			
旅行に行きたい	0.359	0.249			
英語の勉強をしたい	0.005	0.674		遊び志向	1.000
パソコンを勉強したい	-0.030	0.521		スキル獲得志向	0.274
ボランティアをしたい	0.014	0.460			
資格をとるための勉強をがんばりたい	0.011	0.372			
回転後の負荷量平方和	1.585	1.298			
重み付けのない最小二乗法、プロマックス法(3回の回転で収束) 負荷量0.350以上を採用					

次に部活動参加状況により、大学生生活に対する志向性に違いがあるのか検討した。具体的には大学生生活に対する志向性に関する因子分析によって算出された因子得点を用い、部活動参加状況により因子得点平均値に差があるか明らかにするため一元配置分散分析を行った(表4)。

全学年の結果を見てみると、中学高校ともに部活動参加状況によって、遊び志向、スキル獲得志向の平均値に統計上、有意な差があったことがわかる。共通して不参加者の平均値が低く、部活動不参加者は大学入学したのち、遊びやスキル獲得について積極的ではない傾向が読み取れる。

学年別で見たとき、1年生については中学部活動については統計上、有意な差が見られ、全学年の時と同様に、中学部活動不参加の大学1年生は遊びやスキル獲得について積極的ではなかった。高校部活動についてはスキル獲得志向において有意な差があった。2年生以上についてみてみると、中学部活動参加についてはいずれの因子も有意な差がなかった。一方、高校部活動については1年生と同様に、スキル獲得志向において有意な差があった。特に継続者が退部者や不参加者と比べて平均値が高く、継続者のスキル獲得に対する意識の高さが確認された。

表 4 部活動参加別にみた大学生生活に対する志向性の相違(一元配置分散分析の結果)

		全学年		学年別			
		遊び志向	スキル獲得志向	1年生		2年生以上	
				遊び志向	スキル獲得志向	遊び志向	スキル獲得志向
中学部活動	継続者	0.017 **	0.023 *	0.071 **	0.006 *	-0.040	0.041
	退部者	0.024	-0.083	0.165	-0.083	-0.165	-0.074
	不参加者	-0.239	-0.162	-0.302	-0.275	-0.148	0.024
高校部活動	継続者	0.001 ***	0.061 ***	0.036	0.034 **	-0.037	0.090 *
	退部者	0.064	-0.035	0.112	-0.013	-0.006	-0.069
	不参加者	-0.042	-0.138	0.049	-0.185	-0.153	-0.083

※ 数値は因子得点平均値  
 ※ \*\*\*は $p < 0.001$ 、\*\*は $p < 0.01$ 、\*は $p < 0.05$ 。

## 2 大学生生活に対する志向性の規定要因分析

ここまでの分析結果より、部活動参加状況により大学生生活に対する志向性のあり方が異なっていることが明らかにされた。しかし大学生生活に対する志向性を規定する要因は、中学、高校部活動だけに限らない。高校部活動以外の要因の影響を統制した上で分析する必要がある。そこで大学生生活に対する志向性を従属変数とした重回帰分析を行った。

分析を行うにあたり、本稿では大学生生活に対する志向性を規定する要因として、「属性」「大学生生活（所属大学、サークル活動）」「中学高校時の学業成績（自己評価）」「高校生活」「中学高校部活動」の4つを想定した。そのうち高校生活に関する変数は、因子分析によって抽出された因子を用いることとした。

表5は高校生活の因子分析（固有値に基づく重み付けのない最小二乗法、バリマックス回転<sup>3)</sup>）の結果である。第1因子は「学校の補習は積極的に参加していた」「学校の勉強の予習・復習をよくした」など高校生の時に学校の諸活動を重視する項目によって構成されていたので、「学校重視（高校生活）」と命名した。第2因子は「カラオケによく行った」「いつも流行の服装をするようにしていた」など高校生の時、学外での遊びを重視する項目によって構成されていたので、「遊び重視（高校生活）」と命名した。第3因子は「塾や予備校に熱心に通った」な

表 5 高校生活に関する因子分析結果

	学校重視 (高校生活)	遊び重視 (高校生活)	大学進学重視 (高校生活)
学校の補習は積極的に参加していた	0.640	0.013	0.218
学校の勉強の予習・復習をよくした	0.516	0.085	0.230
校則をよく守る方だった	0.491	-0.289	0.031
遅刻・欠席が多かった	-0.483	0.075	0.028
学校行事は積極的に参加していた	0.439	0.286	0.059
カラオケによく行った	-0.128	0.616	0.001
いつも流行の服装をするようにしていた	-0.083	0.580	0.110
クラスの友人と遊ぶことが多かった	0.172	0.402	0.002
少しでも偏差値の高い大学に行きたいと考えていた	0.134	-0.017	0.822
塾や予備校に熱心に通った	0.066	0.063	0.391
回転後の負荷量平方和	1.418	1.059	0.947
分散の%	14.179	10.595	9.469
累積%	14.179	24.774	34.243

重み付けのない最小二乗法、バリマックス法(5回の回転で収束)  
負荷量0.350以上を採用

表 6 重回帰分析で用いる変数

従属変数	大学生生活に対する志向		遊び志向 スキル獲得志向	因子得点を使用
独立変数	属性	性別	男性ダミー	男性=1、女性=0のダミー変数
	大学生生活	所属大学	国立ダミー	国立=1、私立=0
		大学サークル	サークル参加ダミー	大学サークル参加=1、不参加=0
	中学高校時の学業成績 (自己評価)	学業成績(中学卒業時) 学業成績(高校卒業時)		自己評価による学業成績で、かなり上=5~かなり下=1の5段階
	高校生活	学校重視(高校生活) 遊び重視(高校生活) 大学進学重視(高校生活)		因子得点を使用
	中学高校部活動	中学部活動	中学部活動継続ダミー 中学部活動退部ダミー	
高校部活動		高校部活動継続ダミー 高校部活動退部ダミー		高校部活動に「引退するまで参加」=1、それ以外=0 高校部活動に「途中で退部」=1、それ以外=0

ど高校生の時、大学進学に関する勉強を重視していた項目によって構成されていたので「大学進学重視(高校生活)」と命名した。表6は重回帰分析で用いる変数の概要を示したものである。

表7は重回帰分析の結果である。従属変数が遊び志向の結果を見てみると、属性や大学生活、中学高校時の学業成績、高校生活の影響を統制してもなお、中学部活動参加に関する変数が有意な影響を及ぼしていた。全学年の結果を見てみると、中学部活動継続ダミーと中学部活動退部ダミーが有意な影響を及ぼしており、ともにβ(標準偏回帰係数)の値が正であった。ただし表4をみても、中学部活動参加状況別の遊び志向の因子得点平均値は、継続者や退部者の得点が高いのではなく、不参加者の得点が極端に低かった。具体的には全学年で不参加者の平均値が-0.239、1年生では-0.302となっていた。すなわち部活動参加者の遊び志向が高いのではなく、不参加者の遊び志向が低いと解釈すべきだろう。また表2からわかるとおり、中学

表7 大学生活に対する志向性に関する重回帰分析の結果

従属変数: 遊び志向	全学年		学年別			
			1年生		2年生以上	
	B	β	B	β	B	β
定数	-0.460		-0.388		-0.548	
男性ダミー	0.252	0.145 ***	0.187	0.105 **	0.323	0.191 ***
国立ダミー	-0.024	-0.014	0.083	0.045	-0.083	-0.048
サークル参加ダミー	0.111	0.064 **	-0.016	-0.009	0.211	0.125 ***
学業成績(中学卒業時)	0.044	0.055 *	0.033	0.039	0.058	0.071
学業成績(高校卒業時)	-0.022	-0.028	-0.009	-0.011	-0.029	-0.038
学校重視(高校生活)	-0.031	-0.029	-0.064	-0.060	0.006	0.005
遊び重視(高校生活)	0.480	0.434 ***	0.522	0.451 ***	0.441	0.418 ***
大学進学重視(高校生活)	0.164	0.159 ***	0.126	0.120 ***	0.208	0.205 ***
中学部活動継続ダミー	0.164	0.071 *	0.264	0.092 *	0.110	0.038
中学部活動退部ダミー	0.203	0.070 *	0.233	0.103 *	0.073	0.030
高校部活動継続ダミー	0.052	0.029	-0.037	-0.020	0.124	0.071
高校部活動退部ダミー	0.034	0.014	-0.048	-0.020	0.116	0.046
F値	43.099 ***		22.854 ***		22.444 ***	
R <sup>2</sup>	0.238		0.243		0.255	
調整済R <sup>2</sup>	0.232		0.232		0.244	

従属変数: スキル獲得志向	全学年		学年別			
			1年生		2年生以上	
	B	β	B	β	B	β
定数	-0.292		-0.426		-0.118	
男性ダミー	-0.198	-0.123 ***	-0.170	-0.106 **	-0.249	-0.155 ***
国立ダミー	0.022	0.014	0.023	0.014	0.064	0.039
サークル参加ダミー	-0.004	-0.003	-0.057	-0.034	0.042	0.026
学業成績(中学卒業時)	0.075	0.100 ***	0.083	0.111 **	0.064	0.082 *
学業成績(高校卒業時)	0.002	0.003	0.009	0.013	-0.011	-0.015
学校重視(高校生活)	0.191	0.196 ***	0.220	0.228 ***	0.167	0.167 ***
遊び重視(高校生活)	0.170	0.167 ***	0.143	0.138 ***	0.201	0.200 ***
大学進学重視(高校生活)	0.189	0.198 ***	0.192	0.204 ***	0.191	0.197 ***
中学部活動継続ダミー	0.013	0.006	0.110	0.054	-0.104	-0.045
中学部活動退部ダミー	0.012	0.004	0.192	0.075	-0.191	-0.069
高校部活動継続ダミー	0.137	0.083 **	0.094	0.058	0.187	0.111 **
高校部活動退部ダミー	0.138	0.062 *	0.148	0.070	0.122	0.051
F値	32.823 ***		18.494 ***		15.741 ***	
R <sup>2</sup>	0.192		0.206		0.194	
調整済R <sup>2</sup>	0.186		0.195		0.181	

※ \*\*\*はp < 0.001、\*\*はp < 0.01、\*はp < 0.05。

校の場合、ほとんどの者が部活動に参加していた。そういった中、部活動不参加者は交友関係などに積極的ではなかった可能性がある。そうした部活動不参加の経験が大学生活にも一定の影響を及ぼしていたものと推察される。

学年別についてみてみると、大学1年生において部活動に関する変数が有意な影響を及ぼしていた。全学年同様、中学部活動継続ダミーと中学部活動退部ダミーが有意な影響を及ぼしており、ともに $\beta$ （標準偏回帰係数）の値が正であった。しかし2年生以上の場合、有意な影響は及ぼしていなかった。

次に従属変数がスキル獲得志向の場合の結果を見てみると、全学年の結果から高校部活動継続ダミーと高校部活動退部ダミーが有意な影響を及ぼし、ともに $\beta$ （標準偏回帰係数）の値が正であったことがわかる。

学年別で見ると、1年生においては部活動に関する変数が有意な影響を及ぼさなくなっていた。しかし2年生以上の結果をみてみると、高校部活動継続ダミーが有意な影響を及ぼしており、 $\beta$ （標準偏回帰係数）の値は正であった。すなわち高校生の時、部活動に継続して引退まで参加し続けたことは、1年生においてスキル獲得に対する関心に影響を及ぼすことはないのだが、2年生になると影響を及ぼし、スキル獲得に対する関心を高めることとなっていたと解釈できる。

## IV まとめと考察

### 1 分析結果のまとめ

本稿では本研究は、大学生を対象とした部活動に関する調査（質問紙調査）のデータの再分析を通して、中学や高校部活動への参加が大学生活に対する志向性にどのような影響を及ぼしているのか検討した。因子分析より大学生活に関する志向性として、授業や学習以外の遊びに関心を向けていることを示す「遊び志向」と、大学生活において何かしらのスキル獲得に対する関心を向けていることを示す「スキル獲得志向」が抽出された。2つの因子と中学高校部活動の関連を検討したのち、2つの因子を従属変数とした重回帰分析を行い中学と高校部活動参加の影響について検討した。主な分析結果は次の2点である。

第1は、中学部活動の不参加は、大学生活における遊びへの志向性を低下させる要因となっていた。ただし学年別で見たとき、そのことは1年制のみに確認されることであり、2年生以上は有意な影響を及ぼしていなかったことから、中学校部活動の長期的効果は限定的だった。

第2は、高校で引退するまで継続して参加した経験が、大学生活においてスキル獲得に対する志向性を高める要因となっていた。特に興味深いのは1年生のみの場合、その結果が確認されず、2年生以上において高校部活動継続が有意な正の影響を及ぼしていたことである。大学生活を考えたとき、1年生の場合、入学直後のため、新生活に対する高揚感が高い。スキル獲得に高い関心が向かないのかもしれない。今回のデータは5月頃に実施しており、特に1年生については高揚感が高まっている時期である。しかし2年生以上になると、大学生活を1年以上し、就職など卒業後の生活を徐々に意識し始めた時期にさしかかる。そうした時期において高校部活動を継続して続けた経験が、努力して何かスキルを身につけようとする意識を高めている可能性がある。



## 2 考察 —教科外活動の長期的効果に関する分析可能性—

今回の分析結果をもとに、今後の部活動さらには特別活動も含めた教科外活動の長期的効果に関する分析可能性について考察したい。

まず大学生調査の活用についてである。先述の通り、大学生調査は比較的实施が可能である。今回は初等中等教育上の関心から大学生調査の分析を行うことによって、中高生対象の調査から明らかに出来ない知見を得ることができた。大学生調査を高等教育研究の関心だけに留めず、初等中等教育の長期的効果という視点から、大学生調査の活用を検討することは非常に重要であろう。

大学生調査を分析する上で、時間という軸を意識することが重要である。すなわち時間経過による影響の変化を見出す分析が重要な結果をもたらす可能性を有していることが今回明らかになった。今回興味深かったのはスキル獲得志向についてであり、学年別による分析によって影響力のあらわれ方が異なっていた。今回は大学生のデータのため学年別で行ったが、仮に社会人のデータの場合では年齢別、もしくは卒業後の年数別などで分析することが求められる。ただし今回の結果は擬似的に時間の変化を分析した点に留意しなければならない。同じ大学生なのである程度、同質な分析対象者と考えられるが、1年生と2年生以上の場合、部活動やその他様々な事項において相違があるかもしれない。それゆえ正確に時間経過による影響の変化を測定するためには調査対象者を固定して継続的に調査する縦断的調査の実施が今後、求められる。

また部活動についてはその活動内容に関する変数も分析に組み込むことが求められる。長谷川(2005, 2006)において明らかにされており、同じ部活動参加者でも部活動経験は多様であり、またそのことが部活動の効果に相違をもたらしていた。このことは長期的効果においても同様かもしれない。さらに部活動経験の多様性を考慮した分析によって、具体的な指導の方針を決定するという実践的課題に貢献することが可能になる。仮に、同じ部活動参加者でも、苦手な技術を習得するために練習などで努力し最終的に苦手を克服した学生は、部活動において苦手克服を避けてきたことが多い学生と比べて大学生活においてスキル獲得に対し積極的になるという分析結果がでたとしよう。その場合、部活動の場面において生徒が練習を嫌がったとしても、そのまま生徒の要求に応えるのではなく、長期的効果を考えてとき苦手克服のための練習をさせるという指導が望まれる、という具体的な指針を提供することができる。特に中学校の場合、ほとんどの者が参加していることから活動内容の多様性に着目した研究が高校以上に重要となるだろう。

さらに特別活動など、他の教科外活動についても分析関心を広げていくことが必要である。部活動と比べて特別活動は先行研究の蓄積が少ない。しかし両者とも集団活動という共通点があり、部活動研究の成果を参考にしながら研究することは十分可能ではないだろうか。ただし特別活動は部活動以上に内容の相違に着目することが求められる。部活動は課外活動であり、原則参加は任意であり、今回のような参加状況の相違の分析を行うことが可能であった。しかし特別活動は学習指導要領に定められた正課活動であり、学校の通学する限り、誰もが経験をする活動である。それゆえ調査を行う際には、どういった活動が展開されたのかということについて、把握できる項目の設定が要請される。

今回は量的分析を行ったが、今後は質的な手法を用いた分析が課題となる。質的分析のうち、ライフヒストリーの方法論は注目に値する。子どもを対象にした研究におけるライフヒストリー

一の可能性を検討した山田（2006）によれば、ライフヒストリーを用いることにより、時点間の変化をダイナミックに描くことが可能となる。さらにライフヒストリーは量的な調査とも併用可能であることが指摘されている。

以上の点を踏まえつつ、適切な方法を駆使し今後、教科外活動の長期的効果に関する分析の進展が求められる。

### 注

- 1) 本稿において部活動参加者とは（一時的だったとしても）部活動に参加したことがある者と解釈するので、継続者と退部者の両者を指し示すこととなる。
- 2) 中学と高校の部活動の参加状況の関連についても検討した。中学部活動参加と高校部活動参加のクロス集計を行い、結果をもとにカイ二乗検定を行った結果、有意な差が確認された（ $p < 0.001$ ）（付表左）。中学部活動参加状況によって、高校部活動参加状況に違いが生じていた。さらにクロス集計における各セルの人数を分析対象者全体で除して、各セルの総和の割合（%）を算出し、割合が高い順に並び替えた（付表右）。最も割合が高いのは「中学部活動継続者→高校部活動継続者」で55.6%と半数強の割合を示していた。その他の中学部活動継続者も比較的割合が高い。一方、一度も部活動に参加したことがない者、すなわち中学部活動不参加でかつ高校部活動不参加という者の割合は3.4%と非常に低かった。これらの結果より、多くの大学生は中学校も高校も継続して部活動に参加していた。また中学校の部活動参加は事実上、義務的なものになっており、中学も高校も部活動に参加しなかった者というのは非常に少ないことがわかった。

付表 中学部活動の参加状況と高校部活動の参加状況のクロス集計結果

		高校部活動			計	***
		継続	退部	不参加		
中学 部活動	継続	974	215	271	1460	
	退部	65	38	70	173	
	不参加	45	13	60	118	
	計	1084	266	401	1751	

※ 数値は人数  
 ※ \*\*\*は $p < 0.001$ 、\*\*は $p < 0.01$ 、\*は $p < 0.05$ 。

中学部活動	高校部活動	総和の%	人数
継続	継続	55.6%	974
継続	不参加	15.5%	271
継続	退部	12.3%	215
退部	不参加	4.0%	70
退部	継続	3.7%	65
不参加	不参加	3.4%	60
不参加	継続	2.6%	45
退部	退部	2.2%	38
不参加	退部	0.7%	13
合計		100.0%	1751

- 3) 今回の高校生活に関する因子分析は、分析によって算出される因子得点を重回帰分析の独立変数として用いるために行った。重回帰分析では独立変数間の相関がないことを想定して分析を行うため、プロマックス回転のような斜交回転ではなく、因子間の相関を想定しない直交回転であるバリマックス回転が最適と考えた。

## 参考文献

- Feldman, F. A., & Matjasko, L. J., 2005 “The Role of School-Based Extracurricular Activities in Adolescent Development” *Review of Educational Research*, 75(2), pp.159-210.
- 長谷川祐介, 2005, 「高校部活動の多様性が持つ影響力の違い —パーソナリティへの影響に着目して—」『日本特別活動学会紀要』第 13 号, pp.43-52.
- 長谷川祐介, 2006, 「部活動経験者の高校生活 —活動内容の多様性に着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部（教育人間科学関連領域）第 54 号, pp.71-78.
- 東野充成, 2003, 「部活動と中学生の対人関係」『日本特別活動学会』第 11 号, pp.64-74.
- Mahoney, J. L., Cairns, B. D., & Farmer, T. W., 2003, “Promoting interpersonal competence and educational success through extracurricular activity participation” *Journal of Educational Psychology*, 95, pp.409-418.
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子, 1999, 「中学校生活と部活動に関する社会学的研究—東京 23 区内における質問紙調査を通して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 39 卷, pp.137-163.
- 岡田有司, 2009 「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響 —部活動のタイプ・積極性に注目して—」『教育心理学研究』第 57 巻第 4 号, pp.419-431.
- 斎藤浩一, 2001, 「中・高校の部活動が大学生活適応に及ぼす影響」『日本特別活動学会』第 9 号, pp.24-32.
- 新堀通也, 1987, 「教育効果のとらえ方」市川昭午編著『教育の効果』東信堂, pp.22-40.
- 白松賢, 1995, 「生徒文化の分化に与える部活動の影響」『子ども社会研究』創刊号, pp.80-92.
- 白松賢, 1997, 「高等学校における部活動の効果に関する研究」『日本教育経営学会紀要』第 39 号, pp.74-89.
- 白松賢, 1998, 「高校生の学校生活に関する社会学的研究 —高校生の会話と部活動の関係を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第 44 巻第 1 部, pp.189-194.
- 角谷詩織, 2005, 「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか —学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから—」『発達心理学研究』第 16 巻第 1 号, pp.26-35.
- 角谷詩織・無藤隆, 2001, 「部活動継続者にとっての中学校部活動の意義」『心理学研究』第 72 巻 2 号, pp.76-86.
- 山田浩之, 2006, 「子ども社会研究におけるライフストーリーの可能性」『子ども社会研究』第 12 号, pp.124-141.
- 吉村齊, 1997, 「学校適応における部活動とその人間関係のあり方」『教育心理学研究』第 45 巻第 3 号, pp.337-345.

# The Influence of Club Activities in Junior High School and Senior High School to the Intentionality for University Life

—Possibilities of Analysis Concerning Long-Term Effects of Extraclass Activities and Club Activities—

HASEGAWA, Yusuke

## Abstract

This paper aims to examine the influence of club activities in junior high school and senior high school to the intentionality for university life, based on the re-analysis of student survey data.

The findings are as follows: (1) No-participation of club activities in junior high school was a factor to decrease the intentionality to play in university life. However, this applies to freshmen only. (2) Participation of club activities until retirement in senior high school was a factor to improve the intentionality that started acquiring the skill in university life. However, this applies only to students in the sophomore, junior and senior years.

As a result of this analysis, I discussed possibilities of analysis concerning long-term effects of extraclass activities and club activities. Also, I pointed out the full-use of university student survey, the importance of comparative analysis of the preceding years, the attention in the diversity of activities, the attention in the extraclass activities and possibilities of life history research.

**【Key words】** club activity, extraclass activity, long-term effect